

## 序文

大地から得られる産物は、労働・機械・資本を組み合わせて生み出された成果であり、その産物は土地の所有者、耕作に必要な資本の所有者、耕作に従事する労働者の三者に分配される。

社会の異なる段階においては、土地からの総生産物が地代・利潤・賃金として各階級に配分される割合は本質的に異なる。この割合は、土壤の実際の肥沃度、資本と人口の蓄積の程度、そして農業における技能や工夫、機械器具の水準に主として左右される。

この分配を規定する法則の解明と確定は、政治経済学の最も重要な課題である。トルゴー、スチュアート、スマス、セイ、シスモンディらの著作によつてこの学問は大いに進歩したものの、それらの著作は、地代・利潤・賃金の自然な推移について満足のいく情報をほとんど与えていない。

一八一五年、マルサスの『地代論』と、オックスフォード大学のユニヴァーシティ・カレッジのフェローによる「資本の土地への適用に関する試論」がほぼ同時に公刊され、

真の地代理論が世に示された。この理解なくしては、富の進展が利潤や賃金に及ぼす影響を正確に追うことができず、税負担が社会の各層に与える影響を満足に跡づけることもできない。とりわけ、土地から直接得られる産物に課税する場合には、その重要性はいつそう増す。アダム・スミスを含む有力な論者は地代の原理を正しくとらえられず、この主題を十分に理解してはじめて見えてくる重要な事実の多くを見落としていると私は思われる。

この不足を補うには、著者の有するどの資質にもまさる、はるかに高い能力が求められる。それでも著者は、この主題を丁寧に考え抜き、前述の優れた著作に学び、近年の貴重な実地経験から得た知見も踏まえたうえで、利潤と賃金の法則および税の作用について自らの見解を述べることは僭越ではあるまいと信じる。もし著者が正しいとみなす原理が実際に正しければ、その重要な帰結を余すところなく明らかにする作業は、著者よりも適任で力量のある人々に委ねられることになる。

著者は、通説に異議を唱えるにあたり、広く受け入れられてきた見解と正面から向き合い、アダム・スミスの著作のうち本書の立場と食い違い、異論の根拠となる箇所をあえて取り上げて重点的に論じざるを得なかつた。ただし、それによつて、政治経済学と

いう学問の重要性を認めると、すべての人々と同様に、著者もこの著名な学者の精緻な大著が正当に喚起する賞賛を共有していないと疑われないことを望む。

同様の評価はセイにも当てはまる。セイは欧州大陸においてスミスの原理を正しく理解し評価し、実際に適用した最初期の一人であり、その啓発的で有益な経済体系を歐洲諸国に推奨し広めた功績は、大陸の他の著述家たちの功績をすべて合わせたものよりも大きい。さらに、経済学の構成をより論理的で学びやすい順序に整え、独創的で正確かつ深みのある議論を数多く示して学問を豊かにした。ただし、著者はセイの著作に対する敬意にもかかわらず、学問の利益が要求すると考える自由をもつて、自身の見解と相容れないと判断した『経済学概論』の箇所には注記や論評を加えることをためらわなかつた。